

・近世数学史談という本についての紹介．

著者は高木貞治という数学者で，類体論を完成させたことで世界的に有名である．本書の舞台は 19 世紀のヨーロッパ．独特の語り口で，しかし軽快なリズムで，ガウス・アーベル・ガロアを始めとした数学界の巨人たちの人生を描いている．第一版は 1933 年 10 月の刊行であるが，その面白さは色褪せることはなく，「21 世紀に入って 10 余年がすぎた今もなお，(中略)『近世数学史談』を超えるものはありません<sup>1)</sup>」とは，昨年九州大学を退官された高瀬正仁先生の言葉である<sup>2)</sup>．九州大学の図書館にも数冊蔵書があるので，興味のある人は一読してみてもいいのではないでしょうか．

---

<sup>1)</sup> 日本語で書かれた数学史を語る本において．

<sup>2)</sup> 小谷元子編，数学者が読んでいる本ってどんな本，東京図書